

もうだいぶ前のことですが、「“聖書読み”のコツ」という本を面白く読んだことがあります。そうすると、今まで知っていた聖書の知識とは全く違うことが、いろいろ書かれていて、とても面白く読みました。特に、ルカ文書と言われる、ルカによる福音書と使徒言行録についての、著者の解説がとてもユニークだったのです。

普通私たちは、ルカという人がイエス様の生涯を説明するために福音書を書き、その後で、初代教会がどのように誕生し、発展して行ったか、ということが使徒言行録に書かれていると思っています。ところが、このふたつの書物を全体で眺めてみると、後半の書物は、使徒言行録と言いながら、そこにはパウロの告白の文章がとても長く書かれています。活発に働いていた12年間のことは9章分。逮捕され拘束されてからの3年間を7章分も割いているのです。特に拘束された3年間の方が詳しく書かれています。これはそれを書いたルカが、どうしても書きたかったのだ、とこの本の著者は推測します。

ルカは自分が一緒について回ったパウロの告白をどうしても書きたかったのではないか。この書物の最初は「テオフィロさま」という呼びかけから始まっています。そしてルカによる福音書も同じ呼びかけから始まっています。

ルカは、現在囚われの身である自分の先生、パウロのことをテオフィロに弁明したくて、この使徒言行録を書いた。書いているうちに、そのパウロ先生が命がけで伝えている、ナザレのイエスについても説明する方がいい、と判断して、最終的に2巻の書物を書いた、と言うのです。

私は「テオフィロ」というのは「神様を愛する者」という意味だから、クリスチャンたち一般に対して述べたもので、たまたまルカはパウロの弟子だったので、続編まで書いた、と今まで理解していましたが、ルカは囚われの先生のことを弁明し、何とか助けたい、という意図があって、必死で書いたのではないか、という説明に驚きました。そして、そのつもりで読めば、ふたつのお話の構成もよく似ているし、ステファノという最初の殉教者についての話などは、イエス様そっくりだということまで、納得がいくように思えたのです。このような指摘を受けると、聖書に登場してくる人物が、具体的な存在として、私たちに迫ってくるし、その人たちの信仰が、生き生きと感じられるように思えたのです。

さて、今日の福音書は「盲人バルティマイをいやす」という見出しがついています。

この人は、周囲の人々から叱りつけられ、イエス様になかなか会えないのですが、彼は諦めず、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。」と、何度も言い続けました。そして、必死な願いがかなって、イエス様に会えて、癒していただき、このあとイエス様についていったんですね。

同じことをマタイやルカによる福音書も、エリコでイエス様が盲人をいやして、目が見えるようにしてやり、その人もイエス様についていったことを書いています。ところが不思議なことに、マタイもルカも盲人の名前については何も書いていません。そして、マルコが書いた、盲人の名前についての表現も、独特です。

46節の後半、「ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。」

おそらくずっとこのエリコの町で、この人は物乞いの生活をしていたのでしょう。それにしても、イエス様に体を治してもらった人の名前が、福音書に残っている、というのは珍しいことです。しかも、ティマイという人の子どもで、バルティマイという名前だった、という説明書きまで書かれているとは、どういうわけでしょう。

ユダヤ人が「バルティマイ」という名前を聞けば、バルというのは「だれだれの子」という意味ですから、「ああ、この人は、ティマイという人の子どもなんだな。」と簡単にわかるはずです。それを、わざわざ「ティマイの子で、バルティマイという盲人」と説明しなければならない、ということは、この福音書の読者は、ユダヤ人ではない、ということがわかります。

実際、このマルコによる福音書は、紀元70年頃、つまりエルサレムの町がローマ軍によって滅ぼされた頃、ローマで書かれたものだろう。マルコというペトロの弟子が、ペトロの記憶をもとにして、まとめた福音書だろう、ということがわかっています。

その福音書に「バルティマイ」という名前が登場するのは、みんながこの人のことを知っていたからではないでしょうか。

私は、このバルティマイという人が、イエス様に従った後、どのような生き方をしたのか、想像するしかありませんが、おそらく、このように語っていたのではなんでしょうか。「私はエリコの町で、物乞いをしていたバルティマイという者だが、イエス様が私の目を開いてくださって、明るい人生を歩んでいる。だからイエス様は、わたしたちに命を与えてくださるメシアだと信じている。」このように、イスラエルの国内だけでなく、ローマあたりまで伝道したか、あるいは彼の証しを、大勢のクリスチャンが聞いて、伝えて行ったのだらうと思うのです。

イエス様の12弟子たちは、まだイエス様が何者であるのか、十分にわかっていません。自分たちが社会の中で高い地位に着きたいので、先生をリーダーに担ぎ上げようとしている、野心を持った弟子たちだったでしょう。「自分たちの中で誰がいちばん偉いか」、とか、「わたしたちの一人を右に、ひとりをおいてください。」などと、出世を望む弟子たちです。

しかし、このバルティマイは、今まで道に横たわって、人々に物乞いして、人生をあきらめるような生活をしていたと思われます。でも、イエス様に会って、「このかたは私の目を開けて、私に生きる活力を与えてくださった方だ。」と正しくイエス様を理解していたはずですが。だから、エリコで物乞いだったバルティマイのお話が、マルコによる福音書には、はっきりと名前入りで書かれているのでしょう。

このエリコで、盲人が必死でイエス様に、目を治してもらうように頼み、見えるようになった話は、マタイの20章にも、ルカの18章にも出て来るのですが、バルティマイの名前だけはなぜか消えています。名前を載せては都合の悪い事情があったのかもしれません。しかし、それを補うためのものか、ルカの18章には、「やもめと裁判官」のたとえ話が入っています。

やもめは自分の立場を守ってもらうために、裁判官のところへ何度も訴えに行きます。最初は取り合おうとしなかった裁判官も、根負けをして、裁判をすることになった、という話です。

そしてイエス様は、まとめの言葉として、「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」と言われます。まったく神を畏れず人を人とも思わない裁判官でも、訴えがしつこいと聞くのだから、まして神様は私たちの願いを聞いてくださるに決まっている、というわけでしょう。

ですから、このたとえ話のはじめでは、著者のルカがこう書いています。『イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。』というわけです。

バルティマイにしても、またこのたとえ話のやもめにしても、周りの人が自分をどんなふうに見ているか、世間体などは考える余裕もないでしょう。それくらい必死に願い、要求すること、これが大切だ、とイエス様は言っておられるのです。

こんな必死に求める話を皆さん、他にも聞いたことがあるのではないのでしょうか。

たとえば、真夜中に友達の所へ行って、パンを三つ貸してください。と頼む話。ルカの11章に出てきます。『しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。』とイエス様は言われます。

でも、どうでしょうか。わたしたちは一通りのことをやって、願いがかなわなければ、諦めてしまう、ということがしばしばではないのでしょうか。そして「あきらめないこと」は「大人げないこと」と考えて、自分でできそうにもないことについては、諦めてしまうのです。

わたしたちも、簡単に諦めてしまわないで、なりふりかまわず、求め続け、叫び続けるような信仰が求められているのではないのでしょうか。

先週は、ヤコブとヨハネの兄弟が、わがままな願いをした話を読みました。しかし、それを願い続けて、結局彼らの願いは、その人生を終わりまで見ていくと、それは叶ったのではなかったのでしょうか。

次の聖句が思い浮かびます。ヘブライ人への手紙11章に、

『11:1 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。』とあります。

先ず、私たちは望んで、それを実現するために祈り続けること。それによって、神様は与えてくださる、と確信して歩むことです。そうすると、あとになって、その実現した姿を確認できる。そんな生活が信仰生活だと、ヘブライ人の手紙を書いた人は言うのです。

バルティマイやあのやもめ、友達にパンを貸してくれるように夜中に頼んだ人のように、わたしたちも祈り続けてゆくことを、要求されているように思います。